

も言い切れない面もある。要するに、静止糸切り手法は今回の調査で、時期的位置づけは判明したが、編年的な合理的な位置づけは未だ判然としないという事であろう。

次に注目すべきは、甕 類である。この甕は、土師器の長胴甕に、形態的に類似するものであり、日の出山の前後の窯跡 - 例えば福島市小倉寺窯跡からも出土しているし、新しいものとしては、福島市赤埴瓦窯跡（注4）からも出土している - から出土するものである。東北地方南部に特有な器形といえよう。

注1．宮城県多賀城跡調査研究所における軒瓦の分類番号である。「多賀城跡 - 昭和44年度発掘調査概要 - 宮城県多賀城跡調査研究所年報1969」1970年

注2．工藤雅樹「福島市小倉寺高畑遺跡発掘調査報告、福島市文化財調査報告書第7集」福島市教育委員会 1969年

注3．宮城県栗原郡築館町富野城生野にある。

注4．伊東信雄・伊藤玄三・内藤政恒「腰浜廃寺」福島市史編纂準備委員会 1965年

日の出山窯跡群の諸問題

1 窯跡群の分布

日の出山と呼ばれる丘陵の斜面に分布している窯跡群のうち、発掘調査が行なわれて実態が明確に把握されているものは、今回発掘調査を実施したA地点だけであるが、その他にも表面観察により少なくとも4地点で瓦窯跡の存在することが知られる。このため、今回発掘調査した日の出山丘陵の最東端に位置するA地点より西へ向って順にB、C………E地点と呼び、記述をすすめる。

A地点 今回発掘調査を行なった色麻村四釜字東原142番地の小島重治氏所有地内にあたる。地点の地形および遺跡の状況については、既に述べたので詳説しないが、7基の窯跡から瓦と須恵器が出土しており、軒瓦としては、111Eの重弁蓮花文軒丸瓦とへら書き重弧文軒平瓦が出土している。

B地点 日の出山最高地である三角点から東北方へのびた支丘の尾根に近い西斜面にあたる色麻村四釜字東原153番地の工藤昭人氏所有地にある。同地点はすでに開田されているが、田の畦その他から焼土、瓦片とともにスサ入り粘土による窯壁の破片が採集される。瓦片には、重弁蓮花文軒丸瓦の破片や「上」・「下」の文字をへら書きしたものがある。

C地点 日の出山東南麓にあたる色麻村四釜字東原107番地の小島重治氏の宅地を中心とする地域である。現在では家屋建設あるいは開田、道路建設等の工事のため窯の主要部が破壊されてしまったが、かつては家屋の周囲に窯跡の存在を示す断面露頭かなり観察することができた。

C地点から発見される瓦には111C・111E・111G・116の重弁蓮花文軒丸瓦と重弧文軒平瓦があり、重弧文軒平瓦の凹面に「新田伊……」の篋書きのあるものが出ている。又、230231の細弁蓮花文軒丸瓦と660の均整唐草文軒平瓦もこの地点から発見されていることは注目に値しよう。

D地点 三角点の西北約100mのところにあたる色麻村四釜字東原103番地の今野健氏所有地であり、今野氏の宅地の西斜面一帯には、焼土灰とともに瓦片が散乱している。

出土した瓦は111-A・111-C・111-D・111-E・111-Fの各種の重弁蓮花文軒丸瓦と重弧文軒平瓦及び660の均整唐草文軒平瓦がある。又、この地点からは950の重弁蓮花文鬼板も発見されている（注1）。文字瓦としては篋書きによる「大」、「木」、「常」、「毛」

「上毛」,「上」,「下」,「富田」,「七」及び陽刻の「今」など多種類のものがある。なお、この地点の平瓦には縄目のあるもの、すり消しを行ったものの他に、各種の叩き目のあるものが多い。

E地点 D地点の西北方約70メートルのところにある。通称一ツ橋とよぶ橋を渡って指浪部落に通ずる道路が下りになりかける附近である。平瓦、丸瓦のほかに重弧文軒平瓦が出土している。

2 日の出山窯跡群の諸問題

日の出山窯跡群は今回発掘調査を行ったA地点のほかにいくつかの地点に窯跡があり、少なくとも5地点に窯跡が存在したことは前に述べた。日の出山窯製作の瓦は重弁蓮花文軒丸瓦のグループと細弁蓮花文軒丸瓦のグループに大別される。そのうち最初に重弁蓮花文軒丸瓦のグループについて考えるとA地点の製品は軒丸瓦、軒平瓦ともに日の出山窯の他の地点で製作された他の種類のものにくらべてやや新しい要素が指摘される。

これに対して111A・111Cなどに代表される軒丸瓦は面径も大きく、瓦当の厚さもあり、蓮弁のふくらみなどの点でも、A地点製作の111Eにくらべて様式的に古い要素を持っている。又重弧文軒平瓦の場合でも頸部と体部とを劃する沈線が2本のものが日の出山窯跡群の別地点から出土しているし、平瓦の場合も、他の地点からは桶巻造りのものが出ている。

このように見ると日の出山窯跡群全体としては様式的に古い要素をもつものから新しい要素を持つものまでを含んでいるといえる。そのうちでA地点のものはもっとも新しい要素のものである。次に日の出山窯跡群製作の瓦がどのような所で使用されているかを考えてみたい。まず多賀城跡及び多賀城廃寺跡では111A～Gまでのすべての出土例がある。又、玉造柵の附属寺院と考えられる菜切谷廃寺跡からも111Dがまだ知られていないが他のものはすべて出土している(注2)。これ以外の遺跡では玉造柵推定地である中新田町城生から篋書きよる「毛」の文字瓦が出ており色麻柵推定地の色麻村一関からは重弧文軒平瓦及び文字瓦「木」の出土例がある。

ほかには古川市の伏見廃寺跡から重弁蓮花文軒丸瓦、重弧文軒平瓦が少量出土し、又、116の径11cmに満たない小型の重弁蓮花文軒丸瓦が発見されている。しかしこの遺跡の主体となる瓦は日の出山窯跡群のものとは異なる単弁蓮花文軒丸瓦とロクロびきによる重弧文軒平瓦であり、その時代も9世紀ごろと思われ、日の出山窯跡群の瓦は他で用いたものの転用であろう。

次に230・231の細弁蓮花文軒丸瓦と660の均整唐草文軒平瓦について見よう。これらも多賀城跡、多賀城廃寺跡、菜切谷廃寺跡から出土しているほか、色麻村一関からも出土している。

以上のようなことをもとにして日の出山窯跡群の性格、操業年代についての予察を試みよう。111に属する重弁蓮花文軒丸瓦は古式重弁蓮花文ともいわれ田尻町木戸瓦窯群の製品とともに多賀城創建期のものと考えられている。しかし、日の出山窯跡群の瓦は多賀城跡や多賀城廃寺跡のほかに、玉造柵推定地、玉造柵附属寺院とみられる菜切谷廃寺跡、色麻柵推定地からも出土し、木戸窯跡群の瓦も多賀城跡・多賀城廃寺跡のほかに新田柵推定地からも出土している。

多賀城は陸奥国の国府の所在であり、玉造柵、色麻柵、新田柵も多賀城と密接な関係を持っている城柵であるから、日の出山窯跡群と木戸窯跡群はともに陸奥国の官窯の遺跡であるといえよう。

ところで日の出山窯跡群や木戸窯跡群の製瓦を使用した多賀城廃寺跡や菜切谷廃寺跡の発掘調査の結果によれば110及び111に属する各種の瓦は各建物のまわりからまんべんなく発見され、建物によって異なる種類を用いるようなことはなく、110及び111に属する各種はすべて同時期に用いられたものと判断される。

従って日の出山窯跡群製作の多くの種類の重弁蓮花丸瓦と重弧文軒平瓦は、様式的に差異があり製作年代の点では若干の幅があり、操業期間もある程度の年数を考え得る可能性があるにもかかわらず、使用年代の点では同時であると考えられる。そして、その時期は、多賀城、玉造柵、新田柵などの諸柵やこれに関連する多賀城廃寺、菜切谷廃寺の营造が行なわれた時期である。

多賀城などの营造の年代については文献に明瞭な記載を欠き、ために正確なところはわかっていない。現在行なわれている有力な説は、多賀城の前身は陸奥鎮所であって、これに関する文献上の初見は養老六年であるので、多賀城の創建は養老六年以前にさかのぼるとする説である。陸奥鎮所はその名称からいっても蝦夷との戦いのための基地であり、防禦的な設備と考え、陸奥鎮所の周辺地域に蝦夷の脅威が無くなった時期に国府が遷されて多賀城になったという。

ところが、最近の多賀城跡の発掘調査の結果（注3）では、内城といわれる中枢部は南面する正殿の左右に脇殿があり、南門から発する築地がこれらを方形にとり囲むという規模は創建以来変わっていないことを確認している。又、外城南辺の調査でも外郭は創建以来築地であり、南北中軸線上に外郭南門があり、各地の寺院や国府の外郭と全く同じ構造であることが判明した。これに陸奥国の官寺である多賀城廃寺が附属する。

このような多賀城の調査結果を見ると、多賀城は最初から陸奥国の国府であった可能性が強い。そうすると、文献上の陸奥鎮所を多賀城の前身と考えて、多賀城の創建を養老六年以前と決めてかかるわけにも行かなくなる。多賀城の文献上の初見は天平9年（737）であり、その創建年代もこれを大幅にさかのぼらない時期と考えるのが妥当であろう。

日の出山窯跡群は多賀城などの营造が行なわれている時期に操業をつづけておったものであろうが、A地点についていえば、多賀城創建のための瓦を焼成しつづける最後に近い時期のものであろう。なお、日の出山窯群製作の230・231の細弁蓮花文軒丸瓦と660の均整唐草文軒平瓦の組み合わせは、660が平城宮跡の6721と同種であって、この種の瓦の畿内に於ける編年的位置からいって、奈良時代中期ごろにあてることができる（注4）。従って日の出山窯跡群はこの頃にも活動していたことが知られるのであるが、これは111の重弁蓮花文軒丸瓦を製作していた時期に連続するものではなく、やや時間的に断絶があるのであろう。しかし細弁蓮花文軒丸瓦を出土する地点の発掘調査が行なわれていないので、断言はできない。

以上を要約すると次の通りである。

- (1) 日の出山窯跡群は木戸窯跡群とともに陸奥国の官窯の遺跡である。
- (2) 日の出山窯跡群の製瓦は、多賀城、玉造柵、色麻柵、などの創建に用いるためのものである。
- (3) 日の出山窯跡群製作の重弁蓮花文軒丸瓦の組み合わせは、様式的に古い要素のものまで存在する。
A地点のものはもっとも新しい要素を含むもので、時間的にはやや後出のものと思われるが、多賀城などでの使用に際しては各種のものが同時に用いられた。
- (4) その年代は多賀城などの創建期であり、737年を大幅にさかのぼる時期ではない。
- (5) 日の出山窯跡群は、奈良時代の中期に細弁蓮花文軒丸瓦と均整唐草平瓦の組み合わせを製作した時期に再び活動している。

注(1) 伊東信雄「東北出土の蓮花文鬼板」東北考古学1号 1960年

(2) 伊東信雄「菜切谷廃寺跡」宮城県文化財調査報告書第2号 1956年

(3) 「宮城県多賀城跡調査研究所年報 1969」

(4) 工藤雅樹「平安初期における陸奥国国府系古瓦の様相」東北大学日本文化研究所研究報告別巻第6集 1968年